大蛇の土産

さて、今日は一つお目出たい、面白いお話をして見ましよう。

むかし〳〵、ある處に、田野久左作衛門といふ人がありました。生れ付いて、親孝行な人で、お父さんには、早く別れましたが、年老つたおっ母さんをば、大層大事にして孝行を盡して居ました所が、此田野久左右衛門は、もと〳〵農夫ですけれども、生れ付いて、芝居が上手なのです、夫に近頃は不作續きで、田のものも、畑のものも、思はしく、出來ませんから、農夫の方は、已めて今では、大低、芝居をして其儲けた金で、一人のおっ母さんを養つて居りました、夫で、名前もわんまり長すぎますから、誰も田野久左衛門なんていふ人が居りませんで、大低の人は、皆「田野久」といつて呼びますし、自分も、其方が宜いと思つて居ました。そこで、田野久の評判は、其村許りではなく、遠方までも聞こえて、どうも、田野久の藝は中々甘いと、どこでも言いはやして居ます。

所が、或年の暮、隣り村にお祭りがあつて、其時に一つ芝居をやらうといふことで、とう〳〵田野久の一座を雇ひに參りました。仕方がない、田野久は、おっ母さんに分れるのは、いやですけれども、お金儲けのことですから、暫らく行つて來ようと、いふので、おっ母さんにお別れをして、仲間の人等と隣村へ乘り込んで行きました。

すると、隣り村では、大評判、田野久一座の芝居だといふので、毎日〳〵中々の大入りです。

所が、困つた事が出來ました。夫は　田野久のお母さんが、大病になつたといふ報知が、來たのです。さー、孝行者の田野久ですから、もう暫らくもじつとして居られません、皆が、明朝にしたらといふのを振り切つて、其晩方、すぐ仕度をして、たつた一人で村へ歸りかけました。

田野久の考では、何でも、明日の朝までに家へ着かうといふ積りで、大急ぎで以てやつて行きます、所が、隣村との界の所に、大きな山がある一體、此山は、昔から　天狗が出るとか、おばけか出るといつて　皆が恐がつてるものですから、夜になると、誰だつて越える者がないのです。然し、田野久は、そんな事を恐がつては居られないうか〳〵すると　お母さんに遭はれないかも知れないといふ考から、なあに、恐いものかといつて、どし〳〵此山を越えかゝりました。

さて、だん〳〵坂道を上りつめて、とう〳〵此山の峠まで來ましたのが、さようさ、丁度、夜中の二時頃でしたらう、人影は無論のこと鳥も、獸も、皆寢しづまつて居ると見えて、其寂しさといつたらない位、田野久は、やつと、こゝまで來てまあ一休と思つて、見ると、そこに小さな小屋がある、で、そん中に這入つて、暫らく休んで居りました。所が、さあ大變、どこでとなく、ゴーッといふ大きな響がしたと思ふと、今度はザーッといふ音と共に、山も木も小屋も、一度に吹き飛ばされ相な大風が吹いて來ました。さすがの田野久も、之には避易して、小屋の隅の方に小さくなつて居りますと、大風は、暫くで已みましたから、まー　よかつたと、ひよいと　顏を擧げた所が、

これには又二度肝をつぶした。身の丈一丈もあらうといふ大入道が、鏡の樣な目を光らかして、こんな具合に。上から、田野久を睨まへて居ました

田野久は、一目見たなり、慄へ上つて念佛を言つて居りますと、其大入道が

『コラ、貴樣は何者だ』といひます。

『はい　田野久で』と蚊の樣な聲で言ひますと大入道は

『何だ、たのきだ、つまらないじやないか、已は年來此山に住んでる大蛇だが、實は、貴樣を人間かと思つたのだ、夫じやわざ〳〵出かけてくるにも及ばなかつたに。しかし、まてよ、たのきにしては　餘程甘く化けて居るな、すつかり人間に見えるよ

といつて、もう全く感心して居ます。

田野久は、小さくなつて聞いて居ましたが、だん〳〵聞いて居ると、どうも大蛇の先生田野久といつたのを、たのきと聞き違つたらしい、之ではひよつとかすると助かるかも知れない、一層のこと　どこまでもたのきになつて居てやらうと考へて居ます。

すると、大蛇は

『オイ　どうだ　中々化けるのが甘い樣だが、一つ已の前で　坊主に化けて見ないか

といひ出しました。田野久は、ハツト　困りましたが、荷物の中に　いろ〳〵芝居の鬘を持つて來た事を考付いて、『へイ〳〵、今化けます』といつて、一寸後向いて、坊主の鬘をかぶつて、『さー化けました』といふと、大蛇は『之は　中々甘い、今度は小さい女の子に化けて見よ』といひますから、田野久は　又娘の鬘を被つて見せると、大蛇は又感心して『なる程、たのきは何にでも化けらるゝな　已は　たつた一つ、こんな大入道にしか化けられないんだ　どうも情ないな』など　いつてしきりに羨ましがつて居ます。

こういうことから、田野久と　大蛇とは、とう〳〵お仲よしになつて、いろ〳〵な事を話し合ふ樣になりました。で、何やかや話して居る中に、大蛇の言ひますには、『おれは　世の中に、何厭な者がないが、煙草の脂が一番嫌だ、おれを、ぶつかけられると、丸で、身體が腐つてしまうからなあ、どうも　あれには叶はないのだ』など言つて、『時に、たのき　貴樣は　何が嫌だ』と聞きますから、田野久は

『へイ、私は　世の中にお金ほど嫌なものはあり

ませぬ　お金を見ると、まうたまらなく恐くなりますよ』

すると大蛇は『へー　お金、妙なものが恐いのだなー』と不思儀がつて居ましたが、其中にだんだん夜が明けかゝつて來ましたので　大蛇は大急ぎで、引き込んで仕舞ひました。

『やれ〳〵危かつた』と田野久は、其小屋を出て山を下り樣とします所へ、樵夫どもが、大勢やつて來て、田野久を見て、屹驚しました。といふのは田野久の顏の色が、もう眞青になつて居ましたからです。夫で、だん〳〵譯を聞いて見て、大蛇に遭つたのだといふことが分りました。咄の序に田野久は、大蛇か一番嫌なものは　煙草の脂だ相なといふことをいつて、其譯を話しました所が、樵夫どもは、夫はいゝ事を聞いた、夫では、今から、すぐ脂を集めて來て、大蛇を退治しやうといふので、村中の人總がゝりで、煙草の脂を集めて夫を大きな樽に積め込んで、どん〳〵と山へ持つて來て、之を水鐵砲の大きなので以て、大蛇の住んで居る、穴を目がけて　打ち込んだ所が、不思儀や、一天俄にかき曇り、大風さつと吹いて、山も谷も、今にも崩れ相な響がすると思ふと、長さ十丈許りの大蛇が、其穴から飛び出して、大空遙に飛んで行きました。

さて、田野久は、其話を樵夫にして置いて、すぐ、自分の宅へ歸つて來ました、おつ母さんの病氣は、思つた程惡くもないので、まづ〳〵と安心をして、大事に看病をして居りました。

すると、或晩のこと、表の戸を　とん〳〵とたゝいて、『オイ、田野久　田野久は居るか』と呼び

ます、そこで、田野久は、はて　誰だらうな　と思つて、表の戸を、ひよいと明けて見て『ワーッ』と腰を抜かしました。

戸の外には、彼の大入道が、所々血だらけになつて、大きな目を光らかして、立つて居たのです田野久の腰を抜かして、そこに打ち倒れたのを見て　大入道は

『やイ　田野久、此間は、よくも〳〵己の嫌なものを饒舌つたな、その爲めに　おれは、とう〳〵こんなになつた。さー　今夜は、其敵打ちに貴樣の嫌な土産を此通り持つて來たのだ』

といひながら、いきなり　金貨だの　銀貨だのを取り混ぜて　幾らとなく手當り次第に打ちつけて歸つて行きました。

田野久は、丸で夢心地でありましたが、入道の歸つた後で、やつと氣がついて、そこいらを見ると、これは如何、家中一杯にお金だらけ。

夫で、田野久は、大蛇の土産のお蔭で、いつになく、お芽出たい　お正月を迎へましたとさ

めでたし〳〵

二人の音樂師

樵村生

或る夏のこと、獨逸國のウインと申します町の公園で、大天氣の極く美しい日に大層盛なる祭が御座いました、其の時に此町に住んで居る人々は身分の尊い人も、身分の卑い人も、若い者も、年寄も、幾万人と數へ盡されぬ程公園へ遊びに出かけました、其の中には又外國から遊びに來て居る人なども澤山雜つて、面白く、樂しく此の盛なお祭